

週日の説教

金 大烈 神父 2009年1月8日(木)

《イエス様ならばどのようにごらんになるでしょうか》

今日の第一朗読(一ヨハネ 4・19~5・4)をよく考えてみますと、カトリック信者である私たちが必ず身につけなくてはならないことが書かれています。

「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。」(一ヨハネ 4・20) 当たり前のことかもしれませんが、しかし、人間を憎んでも神を愛することはできるとしてしまい、そのように行動してしまうのが私たちのふだんの姿ではないかと思えます。私が憎む相手の人も私が知らないうちにご聖櫃の前にひざまずいて祈っているかもしれません。そうしたら、神様の立場では迷ってしまうのではないかと思えます。この人は、あの人のために「赦してください」と祈り、あの人は、この人のために「赦してください」と祈る。神様の立場では、どちらの話に耳を傾ければよいのでしょうか。実際にこういうコメディイのようなことが、私たちの共同体でもキリスト教のどこの共同体でも必ず起きています。それを考えると「神様はものすごく頭が痛くなるのだろう」という気持ちになります。

とにかく、イエス様は、順番をはっきりおっしゃいましたね。「私を愛するためには、まずあなたに与えられた関わりに最善をつくしなさい。それができないのに「主よ、主よ」というのは、意味がない」と。このようなみ言葉を聞くと、自然に反省する気持ちになります。私も、たぶん皆様も、同じだと思います。これは、ただ過ぎてしまう箇所ではなく、自分が何かの関わりを作るとき、何かの関わりにあったときに、いつも思い出す必要がある言葉ではないかと思えます。とにかく、私たちが「神様、イエス様、あなたを愛しています」と告白する前にはこのような準備が何よりも必要なのではないでしょうか。

二番目です。福音(ルカ 4・14 - 22a)の中で読まれた、イザヤの預言者の巻物、これは大体、叙階式や修道者たちが誓願を立てる前に読まれる福音です。その内容は、キリスト信者である私たちに、どのような姿で、どのようなことを目的として、理想的な生き方を望まなければならないかをはっきり教えています。そして、そのためにイエス様が来られたことをイエス様ご自身が告白しています。

「主の霊がわたしの上におられる。」(ルカ 4・18) 私たちは、洗礼を受けたときから、全てのことに聖霊の働きを信じ、その働きに任せようと努力しなければなりません。自分の考え、自分の欲、自分のこだわりによってではなく、「あなたのみ旨はなんでしょうか。あなたに任せます」という従順な姿を祈りの中に表さなければならないと思えます。

「貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。」 私たちはみんな王職に与っています。王というものは、「羊のような、助けを必要としている人々に手を差し伸べ、何とか助ける」そのような使命をもっている人々です。そういう意味で、私たちはどのくらい王職に忠実に働いているか、振り返ってみるべきだと思います。

「主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」 時々、「司祭が政治に参与するのは正しいかどうか」と本当に愚かな話をする人々が教会の中にいます。韓国でも結構そういう論争がありました。たとえば、1970年代から1980年代、独裁政治をみんなが怖がっているときに、結局、独裁者の前に行き、命をかけて叫んだのはカトリック司祭達でした。それなのに、「司祭は、信仰の中にいるのになぜ、祈りや霊的なことに忠実にしていないで、社会的、政治的なことに力を入れるのでしょうか」とものすごく保守的な目で見ると結構いました。

司祭は、宗教・国・お金のあるなしには関係なく、必要とされている場所に行かなければならない

のです。政治的だから場所が違うと言うのは、矛盾しています。信仰の中に全部入っているのです。もし私たちが必要なところで叫ぶことができなければ、それが政治的に見えるか社会的に見えるかに係わらず、その信仰は死んでしまった信仰です。もし説教の中で政治的な話をする司祭がいても、たぶんその方は自分の考えとして、これは正しいと思って話しているのでしょう。それなのに、"私たちはそういうことを望みません。反対します" という人がいるとすれば、その心についても振り返って見るべきではないかと思います。

とにかく、この世の中をいろいろに分けて考えるのではなく、一つに見ることが大切です。

今、イスラエルのガザ地区では、パレスチナの人々が、子ども達を虐殺しています。それを見て、"祈りながらロザリオをしましょう" というのは大切なことです。しかし、祈っただけで、満足した気持ちになってしまうのでは大きな罪です。カトリック信者である私たちは、今、彼らが感じている痛みをその何倍以上も感じるべきだと思います。それによって私たちは、その傷みに一緒に与ることになるのではないのでしょうか。

とにかく世界も一つ、宇宙も一つです。そして全ての人々も、自然も一つです。その中で、「イエス様ならばどのような目でこれをごらんになるのか」考えるべきだと思います。

今日の福音は司祭に限られている話しではありません。信者である私たちならば、社会的なことにも政治的なことにも、福祉関係のことにも敏感にアンテナを働かせなければならないと思います。

今日の福音をとおしてもう一度私たちも振り返ってみましょう。口では、頭では、「気の毒だ、かわいそうだ」と言いながらも本当に自分の痛みのように感じているのでしょうか。その圧迫されている人々のために犠牲をしようとしたことがあるのでしょうか。よく考えてみると、たぶん私たちの心は誰もみんな「恥ずかしい」と答えるのではないかと思います。

私たちは、この世界で動いている全てのことから逃げられないことを意識しましょう。

ありがとうございました。